

火曜のお昼はー

ラジオスタジオの副調整室のガラス越しに、パーソナリティがおしやべりする姿が見える。RCC中国放送の平日正午からの生放送「おひるーな」のメインパーソナリティ、おだしずえさんと、火曜日レギュラー、作家でライターの清水浩司さんだ。約3時間の生放送。ゲストとの話やニュース、ラジオショッピング、音楽など、分刻みで続くコーナーを軽妙なトークで、次々とこなしていく。清水さんは、この番組がスタートした4年あまり前から出演している。しゃべることは得意でないという清水さんだが、ほんわかとした声で、映画や音楽について語る様子は、すっかり板に付いているようだ。

活字が人生を変えたー

父親の仕事の関係で、子どものころから中国地方を転々としてきた清水さん。

「2〜3年で引越しをする暮らしは、根無し草的な感覚。逆に3年でリセットされないと気持ち悪いくらいでした」と苦笑い。

ふるさととは、親のよう。
はがゆくも、ダサくもあるけど、
放っておけない。ーチャリンコで走り回ったまち大竹ー
清水 浩司 さん(作家・ライター)

昨年、80年代の広島を舞台にした青春小説を発表した清水浩司さん。お昼のラジオ番組の声でおなじみの方も多いだろう。大竹で少年時代を過ごした清水さんにとって、ふるさととは何なのか、話を伺った。【取材 企画財政課】

そんな清水さんが、大竹で暮らし始めたのは中学2年のとき。当時、油見にあった住まいから広島市の私立中学校に通っていた。通学の行き帰りに電車の窓から眺める瀬戸内海の穏やかな風景が好きだったという。学校に居場所を見つけれなかった少年時代、本屋や図書館が心休まる場所だった。「駅前商店街の秦政書店などで、よく立ち読みをしていました。図書館で勉強をしながら、早く田舎から都会へ出て行きたいと思っていました」。

自分の思いを会話で表現することが苦手だった清水少年は、文章を書くことで、何かを伝えようとした。80年代後半、ロック好きの若者の支持を得



RCCのスタジオで生放送を終えてくつろぐ清水さんと「しーちゃん」こと、おだしずえさん。

進学。お決まりのコースのように、大学からも足が遠のき、音楽に入り浸る日々を過ごす。卒業後、ちょうどパソコンが普及し、プロのように自分たちで雑誌が編集できるようになってきた時代。小さな出版社を手伝うようになった。

その後、出版社を辞めた清水さん。ときは90年代、バブル経済は弾けていたものの、音楽業界はバブル真つただ中。CDが売れに売れ、ミリオンセラー続出の時代。レコード会社から宣伝用の文章の仕事が舞い込み、気がつけばフリーランスの音楽ライターになっていったという。

取材したアーティストも奥田民生、ミスチル、スピッツ、

広島、そして大竹ー

清水さんに大きな転機が訪れる。37歳で結婚した妻をがんで亡くしたことだ。結婚直後、がんが発見され闘病9カ月あまりで、生まれたばかりの子どもを残して他界。妻との闘病記は『がんフーディー日記』として出版、映画化もされた。その

後、幼子と広島に帰り、ライター、小説家、パーソナリティとして活動。今に至る。

ふるさととは何なのかを問いかけていたような作品になっている。

昨年『愛と勇気を、分けてくれないか』という青春小説を書き上げた。清水さんと同じように転校を繰り返してきた高校2年の主人公が、広島で送った1年間の甘く切ないドラマだ。それは都会の生活にあこがれ、田舎から飛び出していった清水さんが、年月を重ね帰郷し、

広島にゆかりの作家や作品を書店員や情報誌編集者が選ぶ『広島本大賞』に、清水さんのこの作品もノミネートされている。今回で9回目を数える賞で、3月に大賞が発表される。「良きにつけ悪しきにつけ、大竹や広島に対して思っていた気持ちにケリをつけたほうがいい」と思って書きました。原

音楽ライターの日々ー

高校卒業後、東京の大学に

「今でこそパソコンで活字印刷ができますが、自分の書いた汚い字がきれいな文字になってレイアウトされているのを見たときは、達成感というか、ワーーッ!と思いました。人生を変えた出来事で、自分はこの仕事でやっていけるんじゃないかと」。

爆やカープのこととも違う、自分にとってリアルな広島が書きたかったのです」。



「愛情と近いがゆえの近親憎悪的な部分も含めてですが、ふるさととは、まるで自分の親のようです。はがゆくもあり、ダサいところもあるけど、放っておけない存在。大竹のまちをチャリンコでふらふらと、本屋や図書館をまわった記憶が鮮烈に残っています。そこが自分の原点のようですね。実家が大竹にあるので、今でも週に1回くらいは帰ります。玖波港のあたりを散歩することもあります。本当にこの海はきれいだなと思いますよ」。

窓越しに海を眺めながら、清水さんはしみじみと言葉にしてくれた。



カープの元監督野村謙二郎さんの著書『変わるしかなかった。』の編集にも携わった。